

風をつかまえて

高嶋哲夫

プロローグ

なだらかに続く緑の丘、その前方に広がる青い海。明るい太陽が燦々と輝いている。極めつけは、丘の上で回っている白い風車だ。どことなく異国を感じさせる、印象的な絵だ。

町立内知小学校四年生の女子児童が、文部科学省主催の「ふるさとを描こう」という絵画コンクールで、文部科学大臣賞を受賞したのだ。この絵が全国紙にカラーで紹介されてから、東京に本社のある数社の観光会社から、町の観光課に問い合わせがあった。

「緑の丘、青い海、輝く太陽。そして、風車。いいですよね」とうっとりした声で言った。「現代を象徴している風景だ。エコパワーの町、内知。ぜひ一度行ってみたい」と続く。

丘と海と明るい太陽。内知町に違いない。

しかし問題は、町に風車はないことだ。それを告げると、「しかしあの絵では」と驚愕の声を上げる。そして「いや、残念ですね。風車さえあれば」という声とともに電話は切れる。

「だから、なんとしても風車を造りたい」

町長の堀江朗は三十分にわたる独演会を終えて、ギョロ目で議員たちを睨みつけると席に戻った。

それを合図に、様々な声が飛び始めた。

「いまどき風車なんかで、町おこしが出来るのか」

「自然エネルギーは、科学の最先端をいくものでしょう。風力発電とか、いいですなあ」

「最先端は太陽光発電というやつじゃないのかね。あのキラキラ光るパネル」

「あれは私らには、難しすぎてダメですよ。それに値段が高い。風車が手ごろでしょう」

「そうそう、第一見栄えがいい。雄大でロマンがある」

「風車を造るのは簡単なのかね。風で電気をおこすんだらう?」

「基本的にはかぎくるまです。大昔からあります。あれに発電機をつけて回し、電気をおこすだけです」

「日本の風車の大部分は、ヨーロッパからの輸入と聞いている。いくらくらいかかるものなのかね」

「大きさによるでしょうが、二億前後かかると聞いています。建設費を入れると、三億弱といったところでしょうか」

飛び交っていた会話が消え、議場はシーンとなった。

全員がその金額の重みに押しつぶされたのだ。

「丘の上に風車が回っている。その形さえあればいいんだ。実は、資金の目処はすでについている」

町長の言葉に議員たちの表情が変わり、視線が集中した。

「いくらですか」

「サンシャインホテルが百万円、観光組合が二百万で三百万」

そうすすな、という顔で町長は議長を見た。

町議会議長の村上祐司は大きく頷いた。彼は町唯一の観光ホテル、サンシャインホテルのオーナーであり、観光組合の理事長だ。

「間違いありません。風車建設資金、三百万円です」

ほうつという声が上がった。誰も、それだけ集まるとは思ってもしなかったのだ。

「いまだき三百万も、よく集まりましたな」

「皆さん、生き残りに必死ってことですよ」

「しかしそれだけで、風車が出来ますか。いましがた聞いたのと、二ケタ違います」

「だから町で、あと二百万。私が責任をもって、ひねり出します。予算は計五百万ということ
でいかがですか」

町長が立ち上がり、議員たちの方を向いた。

「まあ、その程度は仕方がないでしょうな。町の生き残りをかけた大型プロジェクトです」

「と言つても、三億の風車と五百万の風車じゃ、かなり違うでしょう」

「だから、手造り風車をアピールするんですよ。たとえ、少しくらい小さくてもいい。外国から金だけ払って買ってきたものじゃない。地球温暖化阻止に目ざめた町が、官民一体となって総力を挙げて造る風車です。大いに意義があります」

町長は一気にしゃべって、議員たちを見回した。

「果たして風車で町が生き残れるか。小学校の耐震補強に回した方がよくないですか。校舎の耐震レベルを考えると、とても我が子を」

「今週中に設計図を作りたいたいだが」

町長は反対意見を無視して続けた。

「今週中？ あと二日ですよ。無茶というものです」

「かざぐるまのなかの設計図なんているのか」

「道立内知工業高校の教師で、風車を造ってるのがいます。彼なら、喜んでやると思いますよ。物理の先生で、北大卒です。大学では流体力学というのをやってたらしい。環境問題にも非常に興味を持っています。去年の文化祭で、彼が学生たちと造った風車を見ました」

「あれは私も見ました。扇風機のかいようなやつで、百ワットの電球を光らせてましたな」

「今度のは、あんなおもちゃとは違う。高校で造るわけにはいかないでしょう」

「町にも鉄工所があつただろう。ほら、なんとか言つた」

「東間鉄工所です。この不景気だ。あそこだと、この予算でやってくれそうだ」

「私から頼んでみよう。町のために、ぜひ格安で造ってくれるように。社長の東間とは幼馴染だ。一緒に風見丘を走り回つた仲です」

これで決まりですな、と町長は一同を見回した。

「しかし本当に、風車で町おこしができるんですか？」

いちばん若い議員がポツリと言つた。

「じゃ、他に何かいい考えがあるのかね。だったら言ってもらいたいね。それが出来んなら、信じてやるしかないだろう」

町長は若い議員を睨みつけて、席に座つた。

「風車の横になんて犬がいるんだ」

カラーコピーを見ていた議員の一人が、誰にもなく言つた。

「キタキツネですよ。エコと自然か。時代の先端だ。これはいけますよ」

「しかしこの子は、なんでこんな風景を描いたんだろう」

町長が絵を眺めながら呟くように言つた。

第一章 風の町

1

「優ちゃん、じゃないの？」

東間優輝は突然の声に振り向いた。

帰りかけた若い女性客が暖簾から顔をのぞかせ、優輝を見ている。肩までの茶髪に、赤いダウンジャケットを着ている。内には白のヨットパーカーとジーンズ。目鼻立ちのくつきりしたスレンダーな女性だ。一瞬誰だか分からなかったが、すぐに昔の面影がよみがえった。

「由紀ちゃんか。驚いたな」

「ほんと、びっくり。見違えたわよ。なんだか男っぽくなって。帰ってきてたのなら、連絡すればよかったのに」

「もう少し落ち着いてから、しようと思ってた」

「ここで働いてるの？」

早河由紀子は身体を外に出し、頭を店に突っ込んだままの姿勢で、優輝のハッピー姿を見つめている。

札幌、すすき野の居酒屋だった。全国展開しているチェーン店の一つで、若者の客が多く、

特に大学のコンパによく使われている。

「バイク、もうやめたの？ 暴走族」

「昔のように馬鹿みたいに走るのね。ガソリン代も値上がりしたし」

もうそんな年でもないだろう、と思いながら言った。

「家には帰ったの？」

「そのうちにね」

「お父さん、優ちゃんがいなくなってるから、元気がないわよ。一度、顔を見せてあげなさいよ」

「相変わらず、飲んだくれてるだけだろ」

母さんはそのために死んだんだ、と心の中で呟いた。

【続きは書籍・文庫にてお楽しみ下さい】

注意

本作品の全部、または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をすると著作権法、その他関連法によって処罰されます。